母の実家を語る２

koberyo1

リンゴ畠で作った野菜は、味噌汁の具にした。ネギを入れるのはもちろんだが、味噌汁に入れる具材の変わりダネはといえば、アメリカカボチャだろう。
では、アメリカカボチャとは何なのか？
これは春先、畠に直径30センチ、深さ30センチぐらいの穴を掘るのである。この穴を10個ほど掘る。そして、この中に藁（ワラ）を適当に入れ、さらにナマの馬糞（バフン）をコロコロと５個から６個ほど入れる。穴に土を入れ、そこにカボチャのタネを二つ、ないし三つほどのせ、さらにその上に土を被せて終わりにするのである。これくらい、誰にでもできる簡単な作業である。
夏になると黄色い花がたくさんつく。むだ花は摘むが、実が自然につくので放置しておくことも多い。夏が終わる頃には、大小合わせて60個から70個くらいの実がついたりする。
このカボチャ、大きいものになると直径40センチくらいになる。実は堅く、肌はツヤツヤしている。黄色、青色など色彩が鮮やかである。堅いのでまず包丁で切るのは無理である。鉈で、切るというよりは割る。味は栗のような味でポクポクとして甘い。このカボチャだが、置き場所k困って馬小屋の屋根の上に置いた。相当の重量であるので馬小屋の屋根は抜けはしなかと心配したが、風雨にさらされ、より甘味が増した。
この穴を掘るという方法でスイカをつくったりもした。甘いスイカができあがったが、少々手入れが不足した感があった。

リンゴ畠にはムクドリの大群がやってくる。その鳴き声が大変、やかましいのである。どうにも相性のよくない野鳥であった。
この鳥はリンゴ畠の昆虫や気のみを食べる。雪が降るのを好まないので、列島を南下する鳥である。「ムクの木の実が好物だから」この名がついたと言われている。ちなみに「ムクノキ」とは、山地に自生し、しばしば人家の付近や道端に植えられる落葉樹のことであり、高さは20メートルほどにもなる（牧野日本植物図鑑より）。
近年では都市部の公園に進出してきた。くちばしはオレンジ色で、黒い頭部の額（ひたい）と、額（ひたい）に白色が混じっているのが特徴である。大きさはスズメと鳩の間ほどのサイズで、鳴き声がともかく騒がしい。「ジュルジュル、ジュルジュル」と盛んに鳴き交わす。都会では糞害に悩まされ、歓迎されない鳥になった。

毎日、馬小屋を覗いて藁草（わらくさ）をひと抱え与えてやる習慣にしていたが、なぜかわたしがやると後ろ足で蹴るしぐさをする。不審に思い、従兄弟に聞いてみたら、「お前のことが気に入らない」ということだそうだ。新顔は馴染めない、ということだ

そうで、顔見知りになるには時間がかかるとのこと。さて、この記録は昭和20年９月頃から23年２月迄の話で、21年の早春のレンジャクのことは、別途紹介したのでここでは触れないことにする。

　おつぎは視線をリンゴ畠かた弘前城へと転じることにしよう。リンゴの花と同時に桜の花も咲く。これがみごとなまでの「見もの」であって、三千本を超えるソメイヨシノが、葉が出てしまう前に一斉に花を咲かせるのだ。この桜は花のトンネルをつくってくれる。また、はなみの宴席からは、津軽三味線の音が聴こえてくる。眼から、耳から入ってくる賑わいの印象によって、気分は否応にもたかまり、体は鳥肌がたつようである。城の壁は白く、城郭こそ小さいものの桜の色彩とマッチして、はでやかな印象である。

　春が慌ただしく過ぎ去ると、夏の「ねぶた祭り」がやってくる。「ねぶた」は木材と竹で枠をつくり、それに紙を張ってゆく。できあがったものは、さながら巨大な提灯であり、なかに照明（蝋燭）が仕込めるようになっている。扇ねぶたが弘前では主流となっており、牛若丸や弁慶、加藤清正などの姿が色鮮やかに描かれている。このまわりで花笠をかぶった男女が「ねぶた」を担いだり、車に乗せたりして笛や太鼓で音頭をとり、市内を練り歩く。踊りはまた、ピョンと音頭にあわせて跳ねるのである。弘前の町の人々は、このいわれを古代の東北を征服した坂上田村麻呂（さかのうえたむらまろ）が、エゾ征伐をした時、大きな人形に人を隠し、笛や太鼓を鳴らしながらその人形を練り回し、敵をおびき寄せて滅ぼしたという。しかし、この解説は近世の人がつくりだしたもので、本来は重要な民俗行事の一つであって、東北地方では川に色々なものを流す行事が、これに変わったとされている。
　これをどうやら「ネブト」流しと称していたらしい。これがいつしか「ねぶた」となった。災いをもたらす悪霊を流してしまう、という意味である。
　さて、ここからは秋の行事を紹介したい。津軽平野の中央にそそり立つ「岩木さん」、昔から津軽のシンボルであって、岩木山の残雪の模様が、鋤きの形に見えるまで溶けると、田植えの時期がきたことを知るという。農作業が一段落するのが旧盆の頃で、その旧盆も終わると年に一度のお山参詣の時期となる。津軽の氏神である岩木山にみんな揃って登ろうとするイベントである。しかも、津軽全体でスタートするというから物凄い賑わいとなる。村から町から、鉦や太鼓のお囃子に乗って行列がねられてゆく。それに幟を風になびかせながら……。
　「岩木さま」に“山掛け”に行かぬ男は一人前の男ではない、とはよく言われることで

ある。だから、たいていの男はみな登山をしているし、登山することが人生儀礼における大切な折り目であって、津軽の人はこのことを承知していた。

　私はかつて京都大学の心理学の先生だった人で、河合隼雄先生の本にこれと関連した面白い記述をみつけたことがある。それは「大人になることのむずかしさ」というタイトルの本で、先生はいう。
　年から青年になろうとするとき、親離れ子離れが困難なときがある。そのときに強制的に大人へと離陸させる文化的な装置があり、それが「山登り」などの通過儀礼の儀式なのだと。子どもは親元から強制的に離されることによって大人への階段を登ってゆくというわけである。
　こうした儀式、イニシエーションともいうが、こうしたことを経験し、大人になる民俗の行事は非常に大事だと先生は説かれているわけである。